

八色加恋は自分の凡人に等しい頭をフル回転させて、一つの謎に立ち向かっていった。それは、視界に映り込むビニール袋に入れられた異様な物体の塊。それらは、本来は割られて使用されるべきなのにまだ割られていなかった。部屋の隅隅を占拠しているものの正体は、割り箸であった。そしてさらに謎なのは、それら一つ一つの太い頭部とも呼ぶべき部分には、赤い口紅が付いていたこと。

遡ること数時間前。彼女はいわゆる一般的な大学生の夏休みを満喫していたところであった。現在就職活動真っ只中の兄とは違い、大学一年生の彼女には憂いは存在せず、クーラーをガンガンに効かせた部屋の中で、誰にも邪魔されることなく、漫画を読みふけていた。服装は外行きのものではなく、完全に家でだらだらする用のジャージである。外では活動的な彼女も家の中では別人である。

大学生は、もつと言うと文系は、サークル活動によつぽど精を出したり、バイトや車校の日程を大量に詰めたり、弁護士や公認会計士などのなりたい職業が明確に定まっていな限り、基本的には暇なのである。彼女自身、幽霊部員でもお咎めなしの緩い漫画研究会に所属しており、車校は春休みに卒業、バイトは不定期でライブの運営をするだけであり、これ

と言つて就きたい仕事も存在しない。親から暇人認定されても文句は言えない有様だ。

ただ、就活中の兄を見ていると感じるが、やはり上の学年へ行くほど、やれ企業インターンシップ、ゼミ活動、卒業論文など自由な時間を侵食する存在が急浮上してきて、思ったほど自由な時間が取れなくなっていく。

それゆえ、彼女は自分のこのモラトリアムともいえる時間を大切にしていた。端から見ると、墮落していると糾弾されても否定はできないが。

コンコン。そんな彼女のしばしの休日も、ドアのノックによつて中断を余儀なくされる。

「加恋、今暇なんですよ。今から近くのスーパーにあるクリーニング屋に行つて、スーツ取ってきてくれない？ お兄ちゃん就活用のスーツ。夕飯の準備があるから、宜しくね」

「えー、私今忙しいんですけど。そのスーツ、お兄ちゃんなんだから、自分で行かせればいいんじゃない？ てか、夕食遅くなつてもいいから、お母さんが自分で取りに行けばいいじゃない」

「今日お兄ちゃん就職活動の面接があつたのに、ここから十分もさらに歩かせるなんて酷じゃない？ あと明日お父さんが会社早く行かないといけないから、夕食の時間は遅らせ

られないのよ。それによ、加恋。あなたは何をしていますんなに忙しいって言ってるの？ 勉強しているどころか、漫画読んでるだけじゃない！ 忙しいなんて言う資格はありません！」

明らかに母は語気を強めた。

「あと、加恋。その漫画は自分のお金で全部買ったの？ 違うでしょ。言いたいことは分かるわよね。もう一度、聞くけど、クリーニング屋さんに行ってくれるわよね？」

「あーあー、分かりました。行かさせていただきます」

加恋は読みかけの漫画を渋々閉じた。ちなみに、加恋はこのやりとりの中で最後の悪あがきをすることもできたのだけど、不定期で獲得できるバイト代などたかが知れており、実際家族のすねをかじっていたため、パトロンである母の命令には逆らえなかった。

かくして、加恋は家を出ることを余儀なくされた。外行きの服に身を包み、簡単に髪を整えて出発する。自宅外の道のアスファルトからは、夕方とはいえ熱気が感じられる。クリーニング屋に着いて目的のスーツを手にしたが、このためだけに外出したとなると気分的に萎えるため、加恋はスーパリーの立ち読みコーナーで自分へのご褒美をあたえることにした。

最近の漫画雑誌コーナーではシールなどによって、立ち読みを防止する策などがなされているのだが、このスーパーは良心的であるのか、そうした措置が取られていない。無料でひとときの娯楽を享受できるのは、自由に使えるお金の少ない加恋にとってはありがたいことだ。無論、買わないでこの娯楽を手にするのは、法律的には問題ないのだが、倫理的に問題があるのと言うまでもない。

今月号の漫画雑誌は、田中未沙たなかみさという若手売れっ子女優が表紙であった。彼女は二年前放送された連続テレビ小説、「三分の一、黄色」で主演を務めたことを皮切りに、瞬く間に人氣に火がついた。弱冠二十三歳。ロングの髪に、左目の泣きぼくろがトレードマーク。もはや、お茶の間には彼女のことを知らない人はいないほどであった。一年前からは、歌手デビューを果たしており、活動の幅を広げている。

現在彼女は都内高級マンションの一室に一人で住んでいる。一説によると、高校時代、女優になるために上京したのだが、それ以前に住んでいた場所は秘密に包まれているようだ。事務所なりのプライバシーを守ろうとする配慮であろうか。

しかし、秘密を破ろうとするのが人間の性であるからか、彼女の出生地に関してはファンが一つの推測を出している。それは、彼女が加恋と同郷の名古屋出身であると言うことだ。

それは、彼女がテレビのインタビューで天然エピソードを披露したときであった。

『私、その日すごくえらくて、鍵かあの忘れちゃって寝ちゃったんですよ。それで、マネージャーさんにすごい怒られちゃったんです』

『偉い？ 鍵を買う？ 未沙ちゃん、何言ってるか分からないよ』

このやりとりを見たネットの考察班達は、「えらい」とは「偉い」の意味ではなく、「つらい」の意味ではないか、鍵を「かう」とは購入するの意味を持つ「買う」の意味ではなく、「掛ける」の意味ではないかという推測を出した。そして、この二つの言い回し、方言と言った方がいいだろうか、それが名古屋に多く見られるという理由で、彼女の出身が名古屋ではないか、という結論を出した。無論、確固たる証拠はない。加恋は展開を追っていたお目当ての漫画の続きを確認して、一種の満足感を得てそのスーパーを立ち去った。

そのまま家に帰るのも癪しやだったので、加恋は五分遅くなるものの、少し遠回りするルートを選択した。このルートは行きたとは違いますが、小中学校と約九年歩んだ親しみのある通学路だったため愛着があった。閑静な住宅街を、児童登校用の緑

色の太い線を踏みながら意気揚々として歩いていった。パレオ部の最後の試合負けたときに泣きながら歩いたりしたつくとふと、忘れかけていた思い出が脳裏によみがえった。

その刹那、団地から少年の叫び声が響いてきた。

「あ、危ない！」

その声に反応して加恋は声のする方向に体を向けた。視界には、少年が投げたとおぼしきボールが、放物線の軌跡を描いて、加恋の上空を通過していく様子が映っていた。そのボールはカーブを描かなければならないという使命があるからか、塀を越えて、大方予想通りの場所へと向かっていった。民家である。

パリーン。窓ガラスの割れる音。団地の方を見ると、少年達がきまりの悪そうに、そして、そわそわして立ち尽くしていた。加恋には子供達の行為を見て見ぬふりをして通過するという選択肢があった。しかし、子供達をほっとけないという思いもあった。こういうときに、近くの年上の人が年下の人に対して、誤った道に進まないように正しい道へと導かなければならないという使命感もある。そして何より、自分自身も、小学生のときにボール遊びの延長で、近所の家の窓を割ってしまった、親に付き添ってもらって謝罪しにいった、という経験があった。だから、加恋は迷わず少年達に声をかけ

た。

「人って生きていたらどうしてもミスとか過ちとか犯してしまうと思うの。でもさ、大切なのはそれが起こってしまった後にどういう行動を取るかってことだと思ってる。だからさ、謝りに行こ！ 私もついて行ってあげるから」

少年達二人はこくりとうなずいた。

ボールが侵入した家の前に到着した。

「坂田さんのお家か……」

加恋が知っている範囲の記憶だと、この家の主の坂田さんは一人暮らしをしていた。小学六年生の頃に四十五歳だったから、大体今御年五十二歳程度であろう。そのときに、高校のセーラー服を着た娘さんらしき人が出入りしていたから、娘が一人いることは知っている。人づてに、親子喧嘩が原因でその娘さんが出て行ったらしいと聞いているが、事実は知らない。

別の風の噂によると、十年ほど前に離婚はしていたらしい。理由は彼女の本職がいわゆる芸術家というやつであったため、その独特の感性を遺憾なく発揮したことで、夫との齟齬が生じ離婚してしまったそうだ。

ただ、殻にこもって人との関係を絶ち、大学の研究室とい

う象牙の塔にいるタイプの芸術家であったかと言われると、そうではない。小学生の加恋が通学路を歩いていると、いつも心地よい挨拶をしてくれたし、小学生の頃の特別授業では、学校に向向いてくれて、彼女の専門である水彩画を教えてくれた。割と社交的なタイプの人間であったことは間違いない。そういう性格が起因してか、彼女は水彩画の業界ではそれなりの地位まで登り詰めており、この町でもある程度の人は知っていると思われる。

この家の家主なら、きちんと誠実に謝れば許してくれるのではないだろうか。そんな期待を胸に抱きながら、彼女は坂田さんの家のインターフォンを鳴らす。

ピンポン、ピンポン。二回押しても反応がしない。部屋の明かりは付いているし留守ではないなあ、もしかしたら昼寝でもしているのかなあ。そんなことを思っている隙を見て、子供達は勝手に坂田さんの家の庭へと入っていった。

「ちよっと、勝手に入っていったらだめですよ」

「だって、こっちの方にボールが飛んでいったし、ここからなら、家の中が見えるかなーって思ってる」

これは住居不法侵入だな、と加恋は授業で習った法律を頭に浮かべながらも、この家の主人のもしもの場合に備えて、倫理的には憚^{はばか}られるものの、部屋を一度覗いてみることにし

た。

門から左に行くと、そこには色とりどりの花が育てられており、美しい景観を保っていた。この家の家主は園芸などにも情趣深かったことがうかがえる。子供達はそんな景観に目もくれず、ボールがあるとおぼしき目的の地まで小走りで向かっていった。

「あつた、俺達のボールだ」

何もない水面に石を落として波紋を描く芸術作品を体現したかのように、ボールはガラスを突き破って、波紋を描いて、坂田さんの家の廊下に転がっていた。子供達が勝手にガラスの穴に手を差し込み、ボールを回収しようとしたので、慌てて制止した。

「こら、謝るのが先！ それに、割れたガラスの破片でけがでもしたら危ないじゃない！」

「ごめんなさい……」

危ない。これだけがでもされてしまった暁には、監督行き届きを出されてしまう。

そんな中、唐突に一人の少年が質問をしてきた。

「ねーねー、お姉ちゃん。大人の人って床に寝っ転がるのが好きなの？」

「どうしてそんなことを聞くの？」

「だって、あそこ……」

そうして、ガラスの穴から少年が指を指した方向を見ると、そこには階段に足を投げ出して寝っ転がっている女性の姿があった。いや、正確に言うと、倒れていると表現した方がいいかもしれない。もしかしたら、階段から転落しているのでは？ もしかしたら、緊急を要する事案なのではないか？

「坂田さん、坂田さん、寝ているんですか？ 大丈夫ですか？ 坂田さん」

加恋の必死の呼びかけにも何も反応しない。

加恋は左手にずっと持っていたスーツを無造作に庭に投げ出して、無我夢中で、庭先にあつた椅子の先端を使って、窓のクレセント錠あたりにひびを入れてたたき割る。そこから手を入れ、クレセントの取っ手を上げ、窓を開けることに成功した。

鍵を開けるときに手に痛みを感じたが、そんなこと今は問題なかった。

窓から侵入して一目散に坂田さんと思われる女性に駆け寄った。頭から血を流しており、青白い顔で横たわっていた。素人が見ても事切れているような印象を抱いた。子供達には念のため庭に待機してもらっていたが、こんな様子を見せる

訳にはいかず、正解であった。だが、医学的知識がなかったため、もしかしたら、まだ、助かる見込みがあるかもしれない、と一縷の望みを胸に抱いて、携帯の緊急ダイヤルで119を押した。

「すぐ来てください、女性が血を流して倒れています」

その後、女性は病院に搬送されたが死亡が確認された。死因は後頭部強打による脳挫傷。加恋も感じていた通り、警察は二階へ上がる途中の階段から足を滑らしたことによる事故死と判断した。

その後、警察が来て、少年達がガラスを割ったことを軽く注意して、彼らを帰らせた。私も、窓ガラスを割ったことは軽く注意されたものの、人命救助のため、という道義のもと、許された。

ただ、一応現場で軽く状況を説明するように促された。

「窓ガラスから、人が倒れているのが見えたので、助けなきゃ、と思って無我夢中でガラスを割って駆け寄りました。それで、もしかしたら助かるかもしれないと思って、救急車を呼んだんです」

「ふーん、なるほどねえ」

警官はバインダーに挟んだ書類に何か書き込んでいるよう

だった。もしかして私は疑われているのではないか、加恋は警察という権力を前にして、そんな疑心暗鬼にとらわれた。「あー、心配しなくていいよ。これは、事件の資料を書くために関係者の皆さんに形式的に質問して、メモを取っているだけだから」

加恋の心を見透かしたかのように、警官の人が間髪入れずに口を開いた。

「それに、亡くなった被害者さんは、二階から伸びていた掃除機の延長コードに引っかかって転落したって見立てであるし、殺人などの不審な点は見当たらなかったから」

ふー、疑われていなかった。加恋はそっと胸をなで下ろした。確かに、殺人とかの場合は第一発見者が怪しい。なぜなら『時間差密室』が偽装しやすいからだ、とミステリーが好きな友達が言ったことを思い出した。ミステリーに通暁つうきょうしている人にしか、何を言っているのかは分からないと思われる。それは置いてといて、事故死の線が濃厚ならば、加恋の心配は杞憂ということである。

「それじゃあ、ご協力ありがとうございます。また何かあったら連絡するから。あ、そうそう、クリーニング用のスーツ、庭に置いてあったけど君のかい？」

そう言って、警官はスーツを見せてくれた。せっかく、ク

リーニングでしわ一つなかった状態だったのに、見るも無惨に泥やしわが付いていた。

「私のです。ありがとうございます」

加恋は兄に多少怒られることを覚悟しながら受け取った。

自分の知っている坂田さんが亡くなった。やはり、人間は普段意識の底に埋没させているけど、人間はいつか死ぬものだ。寿命に病氣、交通事故や地震や台風などの天災で亡くなることだってある。自分の肉親である、お母さん、お父さん、お兄ちゃん、そして、自分だって明日死ぬかもしれない、そんなことが頭をよぎる。

気づけば太陽はとつくに沈み、月明かりが差し込んでいた。

ふと、部屋の窓近くにある^{たんす}箆笥の上の写真立てに目が行った。

そこには、笑顔の坂田さんと小学生くらいの少女が映っていた。なぜだろう、坂田さんの娘さんとはあったことはないはずなのに、どこかで懐かしさを感じた。写真立ての裏を見てみると、「愛しの美奈と」と書いてあった。加恋が見たかもしれない娘さんの名前であろうか。

リビングの机の上には、割と小型なオーディオとCDが置いてあった。邦楽などを聞いていると思ったら、意外にもそれは加恋の知っている人物の曲だった。人気アイドルの田中

未沙。人は見かけによらないものだ。もつとも、人の大切にしているもの、趣味などに干渉するつもりはないが。

警官が待っている玄関を指して歩こうとした矢先、加恋の足がビニール袋に当たった。多分、ゴミ袋なんかであろう。そんな軽い気持ちであった。ちやうどその袋の口が開いていたので、好奇心から中を覗いてみた。その瞬間、加恋は衝撃を受けた。そこで普通のゴミに紛れていたのは、割り箸の数々。しかも、それらは本来割られて使用されるべきなのに、全く割られておらず、さらに奇妙なことに目に見えるそれら全ての頭部、分かりやすく言えば、太い方には、口紅が付着していた。

いったい、どういうこと？

「割り箸の謎？ そんなこと私に聞いてどうするの」

「だって、紀伊馬ちゃん、よくミステリー小説とか読んでいるから……」

彼女は、^{まいまかれん}紀伊馬嘩憐。お気づきのことかと思うが、キーマカレーから取られたと思われる、ふざけた名前である。現実世界であつたら、間違いなくキラキラネームだと^や揶揄されたり、いじめの対象になりかけない名前である。

八色加恋と紀伊馬嘩憐は、ご察しの通り、名前が同じとい

う共通点や、選択する授業が同じであるという共通点から、非常に親しい関係になった。

紀伊馬は同じN大学の人文学部出身であるが、中々変わった人物である。

「悪いね、加恋ちゃん。私殺人事件以外あまり興味ないの。主にたしなんているのは、不可能犯罪もの。いわゆる、犯人が自分の犯行を隠すために施した、アリバイトリック、密室殺人トリックなどを解くやつなの。でも、残念ながら、今回加恋ちゃんが持ってきたのは、おそらく、日常の謎系じゃない？ 私の出る幕はなさそうよ」

「え、でも……。私気になり過ぎて、最近夜もろくに眠れてないの。私、亡くなった坂田さんのこと知っているし、本当に気になって、気になって。私の近くには、他に頼れる人がいないの。だから、お願い！」

加恋が本気でお願しているのは、彼女の目にはつきりと現れていた。それにしても、私気になります、というフレーズに紀伊馬は既視感を覚えた。何の小説であったかは覚えていないが。さらに、あなたにしか頼れない、というフレーズで期待をされてしまった紀伊馬は、無下にするなどできず、引き受けることにした。

「今、私すごく読みたいSFミステリー漫画があるの。全五巻。それを買ってくれるのなら、引き受けてもいいよ。で、

事件のあらましか簡単に説明してくれる？」

「ふーん、たまたま入った家の住人の家に、大量の割り箸があつて、奇妙なことにその全てに口紅が付いていた。その謎を解いて欲しい、そういうことね」

「紀伊馬ちゃんはなんか思いついたことある？」

「そうね、えつと……」

紀伊馬はバックの中を漁って、明太パスタと割り箸を取り出した。

パスタには、購買のシールが貼ってあつた。彼女が昼食用に買ったものであろう。

「例えば、こういう考え。割り箸を割るときに、その人が口に啞えて全部割っていた、って説よね」

そう言いながら、紀伊馬は自ら実践し始めた。割り箸の中腹あたりを口に啞え、右手で引きちぎるようにして引き離した。確かに、このとき割り箸の中腹あたりに口紅は付いていたのだが、加恋が見た割り箸の山とは違った。

「ただ、加恋ちゃんの話聞いてみると、この推理には決定的に矛盾している点がある。それは、割り箸が割られていなかったってこと。つまり、この割り箸は食するときに使われる用じゃなかったってことじゃないかしら」

「食べる用じゃない、ということとは割り箸の本来の用途から外れているということである。中々、難しい問題になってきた。」

「ということは、ここで得られた推理の方針が一つ、この割り箸は、食べる以外に必要なものとして扱われていた可能性が極めて高い。可能性としては、割り箸で工作とか何かをしていたって線もある」

加恋は「割り箸、工作」とネットで検索し始めた。出てきたのは、ガトリング銃や割り箸ブリッジ。前者のガトリング銃は輪ゴムを飛ばすおもちゃのことである。割り箸ブリッジは割り箸を木工用ボンドでくっつけて巨大な橋を作るものだ。ただ、坂田さんの性格から、割り箸のガトリング銃を使っている姿など想像できそうにないし、坂田さんの専門は絵画であったから、割り箸ブリッジを作製するとは考えにくい。もっとも、何かの拍子に作るう、と思ったのなら話は別なのであるが。

「なんか、割り箸使って工作していたという推理も違う気がする。だって、坂田さんがこんな作るとは考えにくいもの」「工作の線はなさそうか……。困ったな、残っている説はいろいろあるけれども、それにはまだ情報が足りない。加恋ちゃん、どんな些細なことでもいいから、なんかあの家で見ても

のとか教えてくれない？」

「えっと……」

加恋は必死に思い出す。あの家の廊下には絵画とかが飾ってあって、棚の上には、写真立てがあった。その写真には坂田さんとその娘さんがいたような……。こんな情報でもいいのだろうか。

「坂田さんと娘さんの写真があつて、楽しそうだったかな。確か娘さんの名前は、確か美奈さんも。それでなんとなく会ったことがあるような」

「さかたみな？ さかたみな、さかたみな」

「どうしたの、紀伊馬ちゃん」

坂田さんの娘さんの名前に何かあるのだろうか。しきりに、紀伊馬はその名前を繰り返してつぶやいた。

「あと、机の上には人気女優の田中未沙のCDがあつたよ。近くにオーディオ機器があつたから、これで音楽を聴いていたのかもしれないなあ、なんて。にしても、坂田さんがああいう曲聴くなんて意外だったなあ」

「田中未沙のCD、オーディオ機器、そして、割り箸！」

「紀伊馬ちゃん、どうしたの？ もしかして、分かったの？」

加恋は呼びかけをするものの、紀伊馬からの反応はなく、石像のように硬直していた。さながら、ロダンの考える人の

ように熟考しているのであろう。

「こんな偶然の一致はないかもしれないけれど、他の推理で進めるよりは説得力のある仮説が立ったわよ。さらなる情報が集まれば、確信へと変わると思う。加恋ちゃん、聞き込みをしてきてくれない？ 近所の人とかに」

「紀伊馬ちゃんの推理に必要なならば、喜んで！」

三日間、加恋は時間が許す限り聞き込みをした。

まず、最近の坂田さんは以前と異なり、挨拶をしても返ってこないという情報を入手した。特に遠くから呼びかけたときの反応が薄かったそうだ。さらに、最近は何町のイベントにも参加しなくなり、関係が疎遠になっていた、という話を聞いた。学校に行って授業をすることも、ここ最近一身上の都合で辞めたらしい。

近くの、加恋があの日行ったスーパーマーケットの店員からも話を聞くことができた。割り箸を買い始めたのはここ最近、一年くらい前からだそうだ。なんでも、まとめ買い。不思議に思った店員の呼びかけにも応じなかったそうだ。

最近こそ会っていないものの、母親のネットワークを使って、古くからの友人にも話を聞くことができた。その人に言わせれば、坂田さんは若手女優に熱を上げるような人ではな

く驚いていた。また、坂田さんは機械を扱うのが苦手のようで、最新式の機械などは触りたがらなかったらしい。最後にした電話のときに、病院に行かないといけないかもしれない、と言っていた。それからは、忙しくなり連絡できなくなった。分からないそうだ。

「得られた情報は以上です。紀伊馬ちゃん、満足いくピースは手に入れたら？」

「予想通りの情報が手に入った。これで、推理が補強されたわ」

紀伊馬は一呼吸置いた。

「結論から言うと、彼女はベートーヴェンに近い行動をしていたのよ」

加恋は困惑した。紀伊馬の口から発せられた意外な言葉、ベートーヴェン。凡人には理解できないような、そんな領域に自分が足を踏み入れている気がした。

「紀伊馬ちゃん、ベートーヴェンってどういうこと？ 坂田さんはどっちかって言うと、絵描きさんだよ？」

「違うって。例え話よ、例え話。順を追って説明していくわね」

紀伊馬は前回同様に割り箸を取り出した。

「今から簡単な音の実験を行います。割り箸と音の出るもの、耳栓があれば準備完了。今回は、このスマホのスピーカーを代用することになります。じゃあ理科の時間にやった対照実験でことで、まず耳栓をしてくれる？ その状態で音楽が聞けるかどうか調べてみたいもので」

「分かった。……」

耳栓をつけている状態なので加恋には声が伝わりづらい。それを考慮してか、紀伊馬がOKサインを出す。

紀伊馬はスマホの音楽リストの田中未沙の音楽を選択した。トラックの再生ボタンが押されて、曲が始まったようだ。当然加恋は耳栓をしており、わずかに音が聞こえるばかりで、音楽は聞こえない。

紀伊馬がこの実験をする前から、常識的に考えてこの結果は予測できていただろう。とはいえ、理科の実験は対照実験というから、紀伊馬がもう一つ実験を行うことは確実だろう。「はい、今からが本命です。まず、割り箸のどっち側でもいいけど、太い方がいいかな。そこを口で咥えます。で、咥えていない割り箸の先をこのスマホスピーカーの音源部分に当てて、軽く接触でもいいわ、加恋ちゃんやってみて」

紀伊馬の実験工程にそって、加恋は割り箸を咥え、咥えていない割り箸の先を机の上にある、スマホのスピーカーの音

源部分に当てた。にしても、外でやるには、まして、女性がやるにはなんともはずかしい動作だ。

「これでひひ(いいい)」

「うん、そんな感じ。じゃあもう一度耳栓をつけてもらいます」

加恋は渋々耳栓をつけた。こんなことをして何になるのだというのだろう。

「じゃあ、この状態で音楽流すわね」

紀伊馬がさつきと同様に音楽の再生ボタンを押す。

その瞬間、加恋の体内、いや、口腔内と言うべきだろうか、音楽が響き渡った。加恋は音が聞こえる訳がない、と思っていたので度肝を抜かれた。耳栓をしているのに……。

耳を塞いでいるのに音楽が聞こえる、という不思議な現象に遭遇した加恋は、音楽が終わって耳栓と割り箸を外した後、戸惑っていた。紀伊馬は実験が成功したようで、さぞご満悦のようだった。

「これはね、骨伝導っていう現象よ」

「コツデンドウ？」

聞き慣れない六つの文字の羅列に、加恋の困惑はさらに深まる。

「音っていうのはね、空気の振動が耳の中の鼓膜を震わせ、

耳の奥にある蝸牛かぎゅうという部分に伝わっていくの。そうやって、音の情報が脳に伝わる訳。要するに、耳が空気の振動を受け取ることにより、音を聞くのが一般的なの。でもね、耳以外から音を受け取ることができする方法が骨伝導こつでんどうって、現象なの」

音の振動、そういえばそういう授業があったなあ、と加恋は遠くない昔に受験で学んだ付け焼き刃の知識を思い出した。

「簡単に言うと、口腔内から音を伝えて聞く方法。今回の場合、スマホのスピーカー自体が震えているから、その震えを直接口から伝える。やがてその振動は歯に伝わり、頭蓋骨、そして蝸牛に伝わることで、音が伝わる。要するに、音は骨でも聞けるってことよ。できつき言ったベートーヴェンのことだけど、彼は耳が聞こえづらかった。その話は知っているわよね？ そんな晩年の彼が音を聞こうとして、タクト、まあ指揮棒ね、それを口に咥えてピアノに当てて、かすかに音を聞き取っていたってエピソードがあるわね。諸説あるけど」

「紀伊馬ちゃん、どこでそんな話を知ったの？」

「音楽の文化研究みたいな授業あったじゃない？ そこで音楽の教授が毎回、面白いと思った感想を読み上げるのよ。その中で、どっかのうんちく垂れ流しの学生がこれ見よがしと書いたエピソードがたまたま耳に残っていただけよ」

その授業は加恋も取っていた。ただ、加恋の場合、教養の

単位が取ればそれでいい、最終テストにプリント持ち込みで単位が取れそうだから楽、などといったように、積極的に受けていたものではなかった。紀伊馬のように、テストには出ないようなところまで詳しく覚えるまで授業を聞いていたかどうかと聞かれると、答えは否、である。加恋は自分の授業にたいする態度を内省した。

「さてこれらの実験から、私達が導き出せる割り箸を咥えたもつともらしい理由を思いつけました。これらの結論から導き出せるストーリーは、坂田さんの耳が聞こえにくかった、あるいは、もうすでに聞こえなかった、ってことよ」

「加恋ちゃんの聞き込みからあくまで推測される範囲の推理だからね、そこんところ了承してね。坂田さんの耳が聞こえづらくなつたのは、割り箸のまとめ買いをし始めた一年くらい前のこと。加恋ちゃんの幼少期の話なんかを踏まえると、おそらく突発性難聴の類いじゃないかな。耳が聞こえづらくなつたことで、仕事を辞めざるを得なかったとすると、説明がつく。補聴器をつけ始めたかどうかは定かじゃないけれど、家にこもりがちになつてからは、あのCDを聞くために割り箸を使って音を拾っていた。今巷ちまたでは、骨伝導イヤホンって言って、できつき説明した原理を使った機械があるみたいだけ

ど、友人さんの話を聞いてみると、坂田さんは機械にあんまり詳しくないみたいだから、使ってなかったかも。私に言えるのは、一般的に補聴器をつけていたからといって、全ての音を聞こえるようにはならない。彼女にとつて、そうしてまでも拾いたかったってことかな。おそらく、その理由は……」

「どう？ こんな感じの推理だけど、この仮説が正しいかどうかもう少し調べてみる？」

「いいよ、加恋ちゃん。ありがとう。私はこれで満足だから」紀伊馬も言っていたが、この謎の全容を解き明かすのは無理かもしれないし、それを加恋は望んではいなかった。あくまでも、日常の謎はそれらしき解答を導き出して納得するということであった。これ以上の詮索は坂田さんのプライベートの侵害になるので、加恋はこの謎のことは忘れることにした。

それにしても、紀伊馬の推理は素人にしては一応筋の通ったものであった。彼女は不可能犯罪系統に心酔しているものの、一応日常の謎にも一家言持っているということであろう。そんなことを思いながら、加恋は改めて紀伊馬に感謝と尊敬の念を示してお辞儀した。

「紀伊馬ちゃん、本当にありがとう！ これで、ほんとにすっきりした！ 約束通り、SFの本五冊用意して、今度会った

ときに……」

「報酬の件だけど、もういいよ。中々興味深い謎だったし。そのかわりといっちゃなんだけどさ、今度お墓参りに行こうよ、もちろん坂田さんの！」

「うん、行こ！」

「それと、今度謎を持つてくるなら、密室殺人とかにしてね」

数週間後、紀伊馬と加恋は墓地に訪れていた。もちろん、坂田さんの。紀伊馬もこの事件を通して坂田さんと関わりを持ったようなものなので、加恋の誘いもあって、参加することになった。

(安らかにお眠りください)

「それにしても、ここの墓地広いね、ほんと」

そう加恋が紀伊馬に語りかけていると、顔が見えないほどの大きさの麦わら帽をかぶった女性とすれ違った。すれ違った後、加恋はなぜか知り合いとすれ違ったような気がして踵を返した。ただ、あのような一般人とは違ったオーラの人が知り合いな訳がない、加恋はそう言い聞かせて墓地を後にした。

田中未沙改め、坂田美奈は亡き母の墓標の前に立った。ひ

らがなにすれば分かる通り、彼女の芸名は自分の名前を入れ替えてもじつはアナグラムというやつだ。女優になるために上京したい、と親の反対を半ば押し切って飛び出して以来、母とは疎遠になっていたのだが、こんな形で再会するとは、彼女自身も驚きを隠せなかった。

母の葬式などには有志の近隣住民や芸術家仲間などが行い、近所の共同墓地にしめやかに埋葬されたと聞いた。次のドラマの撮影の場所が名古屋だったこともあり、オフの日にお忍びで墓へと赴いた。地元が名古屋だったこともあり、彼女はこの地には土地勘があった。

万が一にも人に悟られないように、大きな麦わら帽を目深にかぶって目的地へと向かっていった。

道中、墓参りの帰りの若い女性とすれ違う。

「坂田さん、安らかに眠れるといいね」

自分の聞き覚えのある人物についての会話。母が最終的に、孤独で亡くなったと聞いてはいたが、こう参拝に来てくれる人がいて、天国の母も浮かばれていることであろう。彼女は亡き母へそう思いを乗せた。

閑話休題、最近彼女の元に匿名で手紙が届いた。それも、自分の本名である、坂田美奈宛てに届いていたのである。たちの悪いストーリーカーである可能性は否めなかったが、何か自

分にとって大切な情報を伝えてくれる。そんな直感のためか、無意識に手紙を開封して見ていた。

手紙の内容は、彼女の母の死について書かれていた。それに付け加えて、彼女は耳が聞こえづらくなってもなお、音楽を聴きたいという一心で、割り箸を咥えていたという仮説まで付け加えられていた。

何より彼女を驚かせたのは口紅であった。割り箸に付いていたという口紅は、彼女が思春期に入る前の純粹な頃、女手一つで自分を育ててくれたことへの感謝を込めた贈り物。その色は贈り物の色と一致していた。

美奈は墓の前に到達した。自分の反抗期だった時代、女優になりたいと言ったとき、猛烈に反対され、半分家出に近い状態で上京したこと。それらを走馬灯の如く駆け巡らせて。

美奈の心の中には、あれだけ喧嘩をしたのだからきつと自分を応援してくれている訳がない、そんなしこりがあった。しかし、割り箸の一件を聞き、そうまでして聴こうとしてくれたことから、本当は母が応援してくれていたことに気が付いた。

献花、合掌を終えて、バッグの中から自分の新作のCDと割り箸を添えて。

「天国でもちゃんと聴いてね」

その目からは涙が流れていた。